

「震災復興と岡山の大学生」テーマに

第11回教育フォーラム ボランティア活動の在り方考える

岡山経済同友会主催の教育フォーラムが11月23日（祝・水）午後、岡山市北区柳町の山陽新聞社さん太ホールで開かれた。今年で11回目。8月24日から5日間、岩手県大槌町に学生39人を派遣、現地で救援活動に取り組む特定非営利法人 AMDA の指導を受けながらボランティア活動に取り組んだ経験を振り返るとともに今後、震災復興にどのような支援が必要か、学生たちの意識の変化などを話し合うため開いたもの。現地からの電話レポートを交え、5人のパネリストが熱心にパネルディスカッションを行った。

中島基善代表幹事が「8月に岡山県内の学生たちに被災地にボランティアに行ってもらったが、若い



開会あいさつする中島代表幹事

人たちは多くのことを学んでくれた。今日はこうした体験を語ってもらい今後の支援のあり方などを考えていきたい」と開会あいさつした。

続いて、第1部「被災地からの報告」として3人がレポート。森脇大陸山陽放送報道部記者が8月の学生ボランティアの活動内容、被災地の住民との交流のビデオを放映するとともに「テレビで伝えられることには限界が、あるがそれでも伝えていかなければならない」と語った。AMDAの菅波茂代表は「東日本で大震災では、社会不安の何事もなくすんだのは日ごろ、町内会（自治会）を中心にコミュニケーションが取れ、内なる絆が築かれていたからだ。いずれ西日本にも大震災は来る。今度の学生たちの経験はその時、大いに生かされるだろう」と述べ、大槌町の元持幸子 AMDA 調整員は石田アナウンサーとの電話対談で「学生ボランティアが発した“お互いさま”という言葉に救われた。やってもらってばかりではいけないと思った。山が雪化粧を始めた。これから迎える冬対策を考えないといけない」と語った。

第2部「パネルディスカッション」では炭田優也環太平洋大学学生、森田潔岡山大学学長、黒住宗道黒住教副教主、石川康晴クロスカンパニー社長、高木二三男岡山県産業振興財団プロモータの5氏が石田好伸山陽放送アナウンサーの司会で活発な意見交換を行った。この中で「震災後、何か自分にできないかと思っていたところ、同友会の企画を知り応



教育フォーラムの会場





司会の石田アナウンサー

募した。被災者の人たちに「ありがとう」といわれそんな大きなことができたのか、と思っている」(炭田)、「被災地に行かなければ本当の惨状は分からない。しかし、それができない場合でも、自分にできることをできる範囲でやるということが大切だ」(森田)、「被災地のヘドロを除去

していた時、衣類や写真が見つかり突然破壊された被災者の日常生活を実感した。学生たちも作業をしながら「この住居の人が生きていてくれれば」と思ったはずだ。ボランティアで何かをしてあげるといふより、多くを体験し、被災地の人から学んだことの方が多し(黒住)、「震災後、なにより大事なものは雇用だと実感し宮城、福島で100人の新規雇用を出した。言うまでもないが社会貢献はイベントではない。復旧復興がゴールだ。5年は応援し続けたい」(石川)、「今の若者たちは平時は生きていけるが、乱世は難しいと思っていた。しかし、今回のボランティアぶりを見て、まんざら捨てたものではないと思うようになった。しかし、問題は次。今後、被災地とどう対峙するか、自分で考え行動すべきだ」(高木)などの意見が出た。

閉会あいさつで泉史博代表幹事は「経済人は意外に心配症で当初、現地で学生がけがをしたらどうしたらよいのか、といったことなどを考えていたが、



会場から質問、意見を述べる人たち

いずれも杞憂に終わった。岡山経済同友会としてもこの事業を単年度で終わらせるのではなく、3年くらいは継続したいと考えている。皆さんも一人一人“自分はどういうことができるか”を考え実行してほしい」と語った。

今回の教育フォーラムの様子は



閉会あいさつする泉代表幹事

12月4日(日)午前10時から1時間、山陽放送ラジオで放送された。(現地報告、パネルディスカッションの要旨は次の通り)

第1部 現地レポート

報道の使命とは

①森脇大陸 山陽放送報道部記者

学生時代に阪神淡路大震災で体験した。今回JNNグループの一員として、東日本大震災の取材の他に、岩手県大槌町のボランティアの活動にも同行しました。

学生の皆さんが言われていたことで印象に残っているのは、「テレビと現実が違う」という言葉です。

16年前に学生ボランティアとして、神戸市で炊き出しをしたときに、私も同じ印象を持ちました。

震災報道では、地震の規模などの正確な情報は伝えますが、被災者の現状や心情までを伝えることには限界があります。

今回の取材で目にしたのは、肌で感じる光景、



臭い、体全体で受け止めた感覚など、被災地の惨状でした。想定外、壊滅的というきまり文句では表現しきれないものすごいものがありました。限りある放送時間の中で、どれだけ伝えられるのか、報道人として、自問自答するばかりでした。私たちにできることは、少しでも多くの人に伝えることです。

限界があるにせよ、報道の意義を深く感じさせてくれたのは、学生時代のボランティア活動でした。あふれんばかりの思いを、岡山に帰って、周囲の人に伝えることは、行った人にしかできない、貴重な情報です。こうした意味で、学生ボランティアが、自ら被災地の惨状を実感したことは、意義あることです。

月日の経過とともに、震災報道が少なくなってきたなか、震災を忘れないで、という大槌町の皆さまの言葉が、心に残っています。被災地の皆さまの思いをつなぎとめることが、報道に携わるものの使命だと考えています。

救われた「お互いさま」の言葉

②元持幸子 AMDA 東日本大震災復興事業プロジェクトオフィサー現地調査役

冬が近づき、自宅を無くした人など、冬対策が必要です。アクセスがまだまだ良くない状況です。

学生ボランティアのみなさんに「お互いさま」といわれ、その言葉に救われました。やってもらってばかりではいけないと思いました。これから社会に出ようとしておられる大学生や専門学校生が、被災地で、見て、感じたことは、意義あることで、地元に戻っても、きっと、役に立つはずです。

現地の街並みは一変し、私も被災者の一人として、かつての街並みすら思い出せなくなってきています。鮭が帰ってくるこの時期に、漁協が再開し、ようやく活気が戻ってきました。

生活を組み立てられたのも、たくさんの方々の復興支援活動のお陰。被災地はこれから復興していくでしょう。ボランティアとして支援して下さった学生の皆さまには、そのころに、ぜひ、遊びに来てほしいと思います。

8カ月を経て、地元の人たちはようやく肩の荷が下り、若者が地域の振興に歩み始めようとしているところではあります。

AMDA 健康サポートセンターでは、医療のみならず、復興に欠かせない地域の人たちの交流できる場を提供しております。心身ともに元気になって、いただきたいと思います。

相互扶助忘れずに

③菅波 茂 AMDA 代表



ヒラリー・クリントン氏が「なぜ、暴動が起こらない」と被災地を賞賛したことは有名な話です。暴動が起こらないのは、人間の絆の存在があるからです。被災地には、被災地の外と内をつなぐ絆と、被災地の中で築かれた絆があります。町内会や自治体という日本独特のシステムが、緊急時にいきているのです。人柄で選ばれ、もくもくと仕事をされている地域の人が支えているのです。

ボランティア元年と言われた阪神淡路大震災には、100万人のボランティアが駆けつけました。16年後の今回は800万人が出向いています。

阪神大震災のときのボランティア活動を省みると、援助を受ける側にもプライドがあることを忘れてはならないということです。誰でも、人の役に立ちたい。しかし、受ける側の心情を忘れてはならないでしょう。

被災地で、ボランティアをするときに、知っておいていただきたいことがあります。「あなたが困っているから、助けに来た」ではなく、「いずれ私が困った時は、お願いします」という、困った時はお互いさまという精神、つまり、相互扶助の精神を忘れないでほしいものです。

被災地で、ボランティアをするときに、知っておいていただきたいことがあります。「あなたが困っているから、助けに来た」ではなく、「いずれ私が困った時は、お願いします」という、困った時はお互いさまという精神、つまり、相互扶助の精神を忘れないでほしいものです。

また、大学生を、ボランティアとして派遣し、そのチャンスを与えてくださった岡山経済同友会に感謝します。復興支援を、今後3年間は、続けてほしいと思います。大学生の活動とともに、被災地の復興や経済活動についても、ぜひ、力を貸してほしいと思います。